

剣と魔法の世界でなぜ  
かスタンドが発現した  
んだが

でお

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

これはジョジョの奇妙な冒険が好きすぎる男が無職転生の世界で程よく暴れていく話である。

# 目次

第七話	34
第六話	26
第五話	19
第四話	14
第三話	9
第二話	5
第一話	1



# 第一話

ジョジョの奇妙な冒険という漫画を知っているだろうか。

漫画を見たことがないという人でも1度くらいはあの独特なポーズを見たことがあるかもしれない。

俺は高校生の時にその漫画を読み始めた。今まで絵が濃くて苦手という理由で読んでいなかったが、いざ読んでみるとその独特な言い回しとスタンドバトルにハマってしまい、大人になった今でもずっと読み続けている。

それまでは1度漫画にハマっても1ヶ月くらいで飽きてしまい、読まなくなり捨てていたが、ジョジョだけは飽きずに10年間も読み続けていた。

会社でも時々、〇〇なんじゃ”あ”ないのかと言ってしまふ時がある。

今でも、次の人生はジョジョの世界に転生してスタンド使いになりたいと思っっている。

そして今日もいつも通り仕事をし、家に帰って飯を食いながらジョジョのアニメを見て、風呂に入って上がったら、ホットミルクを飲み、20分程度ストレッチをするという吉良吉影のようなことをし床に就いた。

そして朝起きると真っ白な空間にいた。

いつもの俺の部屋ではない。100冊以上の漫画はどこにもないし、部屋中に飾ってあったポスターもない。

今日は重要な会議があるから、遅れるとまずいんだが……。

そう思って、出口を探すことにした。

夢だと思っていたから、あまり焦ってはいなかった。

過去にも、こういう感じの夢を何度か見たことがあったからだ。あの時は、真っ白な空間に無造作に置いてあった、茶色い扉を開けたら、夢から覚めたので、また同じだろうと思っていた。

そして1分近く歩いた時に、奇妙なテレビとコントローラーを見つけた。

24インチ程度の紫色のテレビと赤黒いコントローラーだ。

「この空間に全然あってないんじゃないのか？」

そしてコントローラーを持った瞬間、テレビが点いた。

そして画面に『1〜8の中から好きな数字を1つ選べ』と出てきた。

ジョジョで1番好きな部のことかな? と思い3を選んだら次は『0〜21の中から好きな数字を2つ選べ』と出てきた。

これは、おそらくタロットカードの番号のことだろう。

3部のスタンドの大半は、このタロットカードが由来だからな。

俺は7と21を選んだ。お気に入りのキャラはポルナレフとDIOだからな。

そして、画面が消えた。結局、これはなんだったんだろう。

そう思ってコントローラーを地面に置こうとした瞬間、地面にドラクエとかFFで見そうな魔法陣が出現した。

「何イッ!? なぜ、ジョジョ関連の質問をしたあとに、ファンタジー風の魔法陣が出てくるんだッ!」

直感で、この魔法陣の上に居続けるのはまずいと思い、急いで離れようとしたが、足が地面にくっついたかのようにまったく動けない。コントローラーを離そうとしたが足と同じで離れなかった。

「まさかのスタンド攻撃!」

そして、あのテレビがまた点いた。

そこには『覚悟はいいか』と出ている。

『俺はできている』とコントローラーで入力した瞬間、足が魔法陣に吸い込まれて行った。

一瞬慌てたが、これが夢だということを思い出し、俺は考えるのをやめた。

だが、これは夢ではなかったのだ。この時、彼が何も入力せずに、大人しく待っていたら自分の部屋で目覚めることができ、会社に行っていただろう。

魔法陣に吸い込まれた彼の肉体、いや、魂はいくつもの世界を通り、そして六つの面を持つ世界にたどり着いた。

これから彼がどうなっていくのか。

それは誰も知らない



## 第二話

目覚めると、金髪で細身の男性が俺を覗き込んでいた。とても綺麗な髪だ。

俺と同じくらいの体格だ。

なぜ、俺の家に男がいるんだ。両親はすでに他界してるし、付き合っている女性もない。

もしかして泥棒か!? そういういえば昨日の夜、部屋の窓を開けたままにしていたかも……。

ん? 待てよ、ここは俺の部屋じゃあないのでは?

ポスターも漫画はなく、あるのは、小さい机と椅子だけだ。それに、ポスターがあるから普段は見えないが、俺の部屋の天井の色は白なのに、この部屋は茶色だ。いつも部屋を照らしてくれるLED電灯もない。

それに、この、男の人も日本では見えないような見た目だ。

金髪、青目の人間なんて純日本人にはいないだろう。俺が知らないだけで、もしかしたらいるのかもしれないが。これは、俺が拉致されたという可能性もあるな……。

このまま、じっとしているわけにはいかない。

そう思い、体を動かそうとしても、金縛りにあったかのようにまったく動かない。声を出そうとしても、「あー、あー」しか出ない。

なぜだ、某高校生探偵のようにやばそうな薬を飲まされてしまった影響で何も出来なくなってしまったのか!?

のんきに、そんなことを思っていると、金髪の男が俺に手を出してきた。そして“持ち上げた”。

……は? いったいどういう事だ? こんな細身の身体で、体重60後半の俺を簡単に持ち上げられるわけが無い。ボブ・サップのように屈強な男でも、こんな簡単に、赤ちやんを抱っこするみたいに、持ち上げられるわけが……。

ん? 赤ちやんを抱っこ?

もしかして……、俺は泥棒に入られたわけでも、外国人の人に拉致されたわけでもなく、これは……俺、赤ちやんに生まれ変わったのか!?

いやいや、そんなはずはない! まず転生というものもおかしいが、俺はまだ死んでないし、ダービーとの賭けで負けて魂を奪われた訳でもない!

(なぜ、俺が……)

そう思っていたが、1つ心当たりがあった。

昨日、見た夢だ。ジョジョ関連の質問をしたあとに魔法陣に吸い込まれる俺……、も  
しかして、あの夢が原因なのか!?

そんなことを思っていた時、部屋に金髪の女性が入ってきた。

これまた、綺麗な髪だな。

(ん?この人指を怪我しているな。早く絆創膏を貼ったらどうだ)

そう思っていると、男性がすぐに女性に近づいて、指に手をかざして、ブツブツ何か  
を唱え始めた。

(そんなことやってないで、早く絆創膏を……)

次の瞬間、男の手が光り、女の傷が消えた。

(……マジになんなんだよここは)

この世界は、かつて俺がいた世界じゃあなくて……。

(魔法というものが存在する世界なのか)

これってあれか?最近ブームの異世界転生とかいうやつなのか?

(どうせなら、ジョジョの世界がよかったのに……。あんな、質問するなら普通ジョジョ  
だろ)

だが、この世界に来てしまったからには仕方がない。

前の世界に、未練はないからな。親はもう死んでしまったし、愛する人もいない。

……俺は27年間何をしていたんだろ。

この世界ではガールフレンドを作って、この人たちに親孝行をしたものだ。

しかし、魔法か。すごく楽しみだ。ジョジョほどではないが、ドラクエとFFに超ハ

マっていた時期があったし、今でも新作は発売日に買っている。

(☒今のはメラゾーマではない……メラだ。☒とか言ってみたくないな)

そんなことを思いながら、俺は再び眠りについた。

## 第三話

俺が異世界に転生して、3年が経った。

二足歩行もできるし、言葉も喋れるようになり、自分の名前もわかった。

ジョイル・ジョレンタイン。それが俺の名前だ。

ジョジョと大統領が混ざっているような名前だな。

父親の名前はジョナス、母親はレイアだ。

俺のあだ名は、ジョジョになるのかなと思っていたが、それは父親のあだ名だったため、俺は普通に名前と呼ばれていた。

少し期待してたのに。

最初は勉強をたくさんして、子供のうちから色々なことを知ろうと思ったが、その知識を得るための本が、家には1冊もなかった。

なぜなら、この世界では本という物が非常に高価だったからだ。この家も、貧乏という程ではないらしいが、息子1人のために本を買う余裕は、なかった。

本が無いならしょうがないと思ひ、両親との会話で知識を深めることにした。

そして、わかったことだが、俺が住んでいるところはアスラ帝国のフィットア領、町

の名前はロアというらしい。

フィットア領で一番大きい都市であり、グレイラットという貴族が治めている町だ。

この町なら、役に立つ本がたくさんあるかもしれないな。

それともう一つ、魔術について少し教えもらうことができた。

魔術は大きくわけて、攻撃魔術、治療魔術、召喚魔術の3つにわかれる。

魔術を使うには魔力が必要なこと。

魔術を発動させる時には詠唱 or 魔法陣が必要。

魔術を使うための魔力は生まれた時からほぼ決まっており、魔力量は遺伝すること。

生まれた時の魔力は決まっているというのが少し厄介だな。RPGみたいにモンス

ターを倒したり、修行をすることで魔力が増えるとかならよかつたのに、これではどれ

だけ努力をしても魔法を撃てる回数は変わらないのか……。

ジョナスとレイアに、魔力の量はどのくらいなのか聞いてみたところ、2人とも普通

の人間の平均くらいらしい。

……まあ、いいか。

別に、強くなるための手段は魔術だけではないからな。

どうやら、レイアは魔術を全然使えない代わりに、剣に自信があると言っていた。

剣神流という剣の流派の初級を持っているらしい。

剣で強くなるという方法もあるから、ゆっくり考えていこう。

——それからさらに5年がたった。

俺も、もう7歳だ。使えるようになった魔術は、初級治療魔術のヒーリングだけで、剣に関してはダメダメだった。

最初、この魔術を使えるようになった時はとても嬉しかった。2人の両親もとても喜んでくれた。

この時に、家庭教師を雇おうという話も出たが、金の都合で結局雇えなかった。

普通の人間であれば、7歳でここまでやれば上等くらいに思っているのかもしれないが、俺は少し焦っていた。

前世の記憶があるから、普通の人間より自分は強くなれると思っていたが、それは思いがりだった。

フィットア領のブエナ村というところには俺と同じ年齢ですごい魔術を使える子供がいるとジョナスから聞いた。

会ったこともない他人と自分を比べるのは、少しおかしいと思うが、比べざるをえない。

(本当に俺はこれから強くなれるのだろうか……)

そんなことを思っていた時、突如、この世界に転生する前の夢のことを思い出した。

結局、この夢はなんだったのだろうか……。

その時、とてつもない痛みが俺の頭を襲った。

「くっ……ぐうッ!?!」

すぐにヒーリングをかけたが、効果がなかった。

1階から両親を呼ぼうと思った。だが……

(ここで助けを呼んでしまつては……、俺はもう強くなることができない気がするッ！  
このまま、何もせずに一生を終わらせてたまるかッ！)

ここで親を呼ばばすぐに、中級魔術で治してもらえただろう。だが、ジョイルの本能がそうはしなかった。この痛みを乗り越えれば、新たな道が切り開けると思ったからなのかもしれない。

痛みと戦うこと約1分、ようやく痛みが消えた。

ジョイルは……、笑っていた。

あまりの痛みに、頭がおかしくなったからではない。

この世界では入手不可能だと思っていた力、前世で欲しくて堪らなかった力を手に入



れたからだ。

「あの夢はそういう事だったのか……。あのテレビは、俺が望む力を与えてくれたのか……。……。」

フフフフ……ハハハハハハハハハハ！」

そう高笑いするジョイルの後ろには、銀の甲冑を纏っている大柄な男がいた。

「まさか、シルバーチャリオッツとザ・ワールドの特性を持つ、スタンドを手に入れられるとはなア！」

道は切り開かれた。

## 第四話

スタンドらしきものが発現してから4日がたった。

色々実験をした結果、わかったことが3つある。

1、この世界でスタンドを使う時は魔力を消費すること。

おそらくだが、この世界のスタンドは、自分の精神を具現化したのではなく、魔力を具現化した存在なのだろう。そうじゃあなければ、魔力なんて消費しないはずだ。

まあ、俺の魔力量でも、1時間は動かすことができるから、そこまで気にする必要はなさそうだ。

2、ジョジョと同じで、一般人にはスタンドが見えない。

両親の目の前で、これが見えるかと聞いてみたが、2人とも、どこを見ればいいのかわからないというような顔だった。

おそらく、同じスタンド使いでなければ見えないだろう。

だが、俺の魔力を見ることができれば、スタンドを使えなくても見れるかもしれない。この世界のスタンドは魔力でできているからな。

3、俺のスタンドのステータスと能力。

このスタンドに、岩を殴らせてみたり、少し遠くに離れているものに石を投げさせてみたりした。

おそらくこんな感じだ。

【破壊力：A / スピード：A（甲冑を脱いだらもつと速くなる） / 射程距離：D（3 m程度） / 持続力：A（能力を使っている時はE） / 精密動作性：C / 成長性：E】

最初は、7歳でこれほどのステータスなら、もつと強くなれるのでは!?と思ったが、俺の精神年齢が30を超えているから、これ以上の成長はあまりないと思われる。

まあ、強力なラツシユができるからいいや。

そして肝心の能力は……、時を0.1秒止める能力だ。インターバルは5秒程度。

DB超の時飛ばしかよ。

最初は、0.1秒しか止められないのかと残念がったが、甲冑を脱いだ状態のこのスタンドなら、0.1秒でも充分だ。

一瞬で相手との距離を詰めて『無駄無駄』ができるだろう。

高いパワーと圧倒的なスピード、甲冑と時間停止……、本当にチャリオッツとザ・ワールドの力を手に入れたんだな。

ジョジョの世界であれば、強力なスタンド使いになれただろうが、この世界はどの程

度のレベルなのかはわからん。

決して油断、慢心はせずにやっていこう。

どのくらいのレベルにまで行けるかはわからないが、行けるところまで行ってやる。

この日から、前より積極的に体力トレーニングなどを行うようにした。魔術を鍛えるよりも、いざという時の脚力が重要になってきたからだ。

俺のスタンドの射程距離は3 m。かなり、相手に接近しなくては戦うことはできない。

いくら、時を0・1秒止めれるとは言っても、0・1秒で数10 mも離れている敵に詰めれるかと言われると少し厳しい。1度時を止めたら、5秒のインターバルが必要だからな。

その時に、相手に詰めることができず技術がなくては一方的にやられてしまう。

そのための、ランニングだ。ランニング程度で、この世界のまだ見ぬ化け物共に追いつけるかはわからないが、やらないよりかはましだ。

以前とは違い、今の俺には強くなるためにやるべき事がわかつている。ならば、それを全力でやるのみだ。

(そういうえば、スタンドの名前を決めていなかったな……)

スタープラチナも名前を付けられてからは、制御しやすくなっていた気がするから、早いところ名前を付けなくてはな。

うーん、少々無難すぎる気もするが、これでいいか。

銀の甲冑と、屈強な身体、そしてその能力。

これはもう、これしか思い浮かばん。

生前、洋楽をもっと聞いていたら違う名前になっていたのかな。

「お前の名前は……、『Silver World』だ」

——そしてさらに3年がたった。

俺は先日、10歳の誕生日を迎えた。

以前より、Silver Worldを自由自在に動かせるようになり、動かせる時間  
間も15分増えた。

時間停止は結局、0.1秒のままだった。やはり、7部Dioと同じで止めれる時間

は決まっているのだろう。

3年間トレーニングをしたおかげか、俺は体全体に魔力を纏うことができるようになった。これのおかげで、俺は、Silver Worldほどではないが、普通の人よりも全然速く走れるだろう。

これのおかげで、距離詰めが楽になったな。

そう思っていた時だった、空の色が茶色と紫が混ざっているような色に変色した。

異世界ではこういうこともあるのかなと思っていたが、外にいる人々も慌てている様子だ。

(何かやばそうだな……)

玄関から外に出て、出かけている両親のところに行こうとした瞬間、空から放たれた白い光りが街全体に広がってきた。

「まずいッ! 『Silver World』ッ! 時よ止まれ!」

慌てて、時間を止めたが、これは0.1秒で対処できるものではない。

その光りは、俺を包み込み——そこで、俺の意識は途切れた。

この日、フィットア領は消滅した。

## 第五話

目が覚めた時、そこは、いつもの見慣れた茶色い天井ではなく、青い空だった。寝ているところもベッドではなく、固い土の上だ。

何が起きているのか、まったく理解できない。

1度頭を整理しよう。

空が紫と茶色があわさった不気味な色になった↓その空の中心から白い光が放たれ、津波のように襲ってきた↓気がついたらよくわからないところにいました！

「……いや、どういふことだよ!？」

さっぱりわからん。あれは、神級魔術師の魔法だったのか、それとも、天国に到達したレベルのスタンド使いが起こしたことなのか。

どっちだとしても、今の俺が知ってもだからといって何か変わる訳でも無い。

そもそも、ここがどういう場所なのかわからん。

俺が住んでいた、中央大陸なのか、それとも別の大陸なのか。

「魔大陸だとしたら最悪だな……」

Cランク以上の魔物しかおらず、公用語も人間語ではなく、魔神語だ。

もし魔大陸だったら、ほぼ、詰むだろう。Cランク以上の魔物よりも、言語をまったく理解していないところが本当にキツイ。

ここからどうするか……、そう思った瞬間、俺のすぐ側にあつた岩陰から3mほどの巨体を持つ狼が襲ってきた。

「うぐツ!?!」

すぐに、Silver Worldを出したおかげで防御することはできた。

(……少し、まずいな)

いくらスタンドがあると言っても、魔物と戦ったことはないし、俺はこの魔物がどれくらいの強さなのかわからない。

スタンドで直接殴るといふ戦い方もあるが、知らない魔物に迂闊に触るのも危険だ。もしかしたら、触ると発動する毒を持っているかもしれないからな。

(……)は少し距離を取って……)

Silver Worldにそこら辺に落ちていている石を拾わせ、それを魔物に向かって本気で投げさせた。

その石はとんでもないスピードで、飛んでいき、魔物の体をぶち抜け、後ろにあつた岩を木っ端微塵にした。

「……ええ?」



結構ビックリした。これだけでは倒せないと思ったから、時を止めようと思っていたが、必要なかつたようだ。

思っていたより、俺のスタンドは強かったのかもしれない。

その時だった、そのまま倒れると思っていた魔物が、最後の悪あがきで、口から液体を吐いてきた。

「……ふう、やはり油断はよくなかったか。『Silver World』ッ！時よ止まれ！」

その瞬間、全てのものが停止した。これで、液体を難なく避けられる。

再び時が動き出した時、魔物は息絶え、地面に横たわっていた。

後ろを見ると、魔物が放った液体を喰らった草が溶けていた。

今の液体は酸だったのか。もし、喰らっていたら、全身が溶け、そのまま死んでいたかもしれない。

これは反省しなくてはいけないな。油断、慢心はしないようにすると決めればかりだったが、さっそく油断してしまった。

次、魔物に出会ったら、確実に頭をぶち抜くとするか。

さっきの魔物はなんだったんだろう。腹をぶち抜いたのに生きているのは、それなりに、強力な魔物だったのだろうか。偶然、強い個体と当たってしまった可能性もあるが。

俺が住んでいた、中央大陸の西部には弱い魔物しかいないはずだ。

ここはフィツトア領でないことが、確実に変わったな。

ここは、北部と南部のどっちなのだろうか。

それとも……。

(まさか、そんなに都合よく魔大陸に着くわけ……、ん？前から、3人の人族……いや、1人は魔族か?)

100mほど遠くから、3人の集団が近づいてきた。

1人はエメラルドグリーンの髪、白磁のような白い肌と、額に赤い宝石が埋め込まれている、魔族だった。

……この男は、スペルド族なのでは？

よく、親が絶対に近づいてはいけない、見かけたとしても見て見ぬふりをして逃げろと言っていたスペルド族の特徴と、一致している。

すぐに、逃げようと思ったが、そばに居た2人の子供を見て逃げるのを躊躇った。

あの子たちは、俺と同じ人族だ。あの、スペルド族の男に脅されて付いてきているようではなさそうだな。まったく、怯えているような様子はないし、むしろ、中が良さそうだな雰囲気だ。

うーん、どうしようか……。

普段なら、親の言いつけ通り逃げてもいいだろうが、今の状況を考えると、この土地の情報は知っておきたい。それに、スペルド族の男も優しそうな顔をしているじゃあないか。

親は恐ろしい種族だと言っていたが、全員がそういうわけじゃあないだろう。

差別は行けないからな。

少し話しかけてみようか。もし、やばくなったら時間止めて逃げよう。

そして、彼らに近づこうとした瞬間

「いかん！逃げろ！」

スペルド族の男が急に叫んだので、後ろを見てみたら、大きい亀のような魔物が俺に迫ってきていた。

……今確信した。ここは魔大陸だ。こんなに頻繁に強そうな魔物が出てたまるか。

さてと、まずは今迫ってきているこいつをなんとかしなくてはな。

距離はおよそ7〜10m程度離れている。それならば、時間を止めてすぐに近づける。

「時よ止まれ！『Silver World！』ッ！」

止めれる時間は、たったの0.1秒だけだが、魔力を纏った俺のスピードならそれで充分。

「時は動き出す……」

3 m以内に近づけた。

やる事はただ1つ、一瞬で、頭を潰すッ！

グチャツ！と気味の悪い音が鳴った。

頭を潰された大亀は、大きい音をたてて地面に倒れた。

今回は、うまくいったかな……。

そして、後ろを振り返ったら、3人は武器を構えていた。

少し警戒させてしまったか。

無理もない。小さい子供が魔物をワンパンしたんだからな。それに、いつの間にか瞬

間移動していた。

警戒しないわけがない。

ここから逃げてもいいが、ここが、魔大陸である以上、単独で行動するのは、とても危険だ。

さっきのスペルド族の男は、俺に人間語で危険を知らせてくれた。おそらく、人間語も魔神語も喋れるのだろう。彼が居てくれるだけで、これからの旅も楽になってくれるはずだ。

それに、この子供たちだが、おそらく俺と同じでフィットア領から、この場所に転移

してしまったのだろう。

何度か、彼らを見たことがある。たしか、2人とも領主の子供だったわけ……。  
彼らは、危険な人物ではない。おそらく、今は俺に不安を抱いているだけだ。

彼らの、信用を勝ち取るための方法は……、少し気が引けるが、全てを喋るか。何か隠し事をしているようでは、仲間としてやっていけないだろう。

肝心なのは、挨拶からだ。第一印象は大事だからな。

こういう時に、使える挨拶を学んでおいてよかったな。

警戒している彼らに近づき、そして……

「はっぴー、うれぴー、よろぴくねー!」

ふっふっふっ、我ながら完璧な挨拶だ!

これで、彼らの警戒も溶けたに違いない!

「「……」」

3人とも凍りついていた。

前途多難だな。

## 第六話

さっきの挨拶は滑ってしまつたが、どうやら少し警戒は解けたようだ。

3人ともバカを見るような目で、俺を見てくれるじやあないか！こいつは危険なやつではないと思つてくれているな。

ここらで、話を聞いてもらうとするか……。

——大体の事は話した。俺の名前、フィットア領からここに転移してきたこと、魔力を具現化させた幻霊を使えること、そしてその幻霊は時間を止めることができること。

さすがに、転生者であることは言えなかつたがまあ、これは言わなくても大丈夫だろう。

スペルド族の男はどうやら、俺の事を信頼してくれるらしい。

多分だけこの人、子供が好きなんだろうな。

最初、俺に近づいてきた時もそこにいる女の子の頭を撫でていたし。

だが、男の子のほうはまだ俺を警戒しているようだ。

ふむ、どうしたものか……。

すると、男の子が俺に話しかけてきた。

「1つ、質問なんですけど、その幻霊はいつ使ったのですか？先程の戦いの時に、まったく見えなかったのですが」

あ、重要なことを言い忘れていた。スタンドのルールを忘れるとはな。

「俺の幻霊は、一般人には見えないんだ。まあ、魔力で出来ているから、そこにいるスペルド族の人には見えていただろう」

「そうなんですか？ルイジェルドさん」

「ああ。少しボヤけているが、2、3m程度の人型の何かが彼のそばにずっといるな」

ルイジェルドと呼ばれた、スペルド族の男は、髪をかきあげて額の宝石を見せてきた。

あの宝石で魔力を見ているのか。

俺のそばにいた、スタンドを目で追っていたから、てつきり目で見ているものだと思っていたが、そうではないらしい。DBの天○飯が持っている第3の目みたいな感じか。

「でも、なぜ、その幻霊を出し続けているのですか？僕たちに危害を加える気がないのなら、必要なことだと思うのですが」

むむむ、まだ疑われているのか。

まあ、これにはちゃんとした理由があるから説明できるがな。

「それはな、ここが中央大陸とは違って——」

「さて。魔物がジョイルに近づいてきているぞ」

ルイジェルドが、そう言ったので、後ろを振り向いてみると、また、あの狼の魔物が、近づいてきていた。

「はあ……俺が、幻霊を出し続けているのは、こういう感じに魔物が襲ってくるからだよ。『Silver World』ッ！時よ止まれ！」

全てのものが静止する。すぐに、Silver Worldで狼の背後に周り、腹をぶち抜かせた。

「時は動き出す」

腹に穴が空いた狼は、パンチの衝撃によって、吹き飛ばされ、近くにあった、岩に叩きつけられた。

「まあ、こういうわけだな。この大陸ではいつ、命の危機が迫ってくるかわからん」

「……わかりました。僕はルーデウス、彼女はエリスで、このスペルド族の人はルイジェルドです」

「どうやら、信頼してくれたようだ。」



エリスという女の子は、何も言わないが、ルーデウスが言うならそれでいい、とても言いたげな表情をしているから大丈夫だろう。

ちやんと、挨拶をしておいてよかった……。

——それから数日間、魔大陸を歩き、リカリスの町、と呼ばれているところについてた。

旅をしている時、ルーデウスに、色々、話をしたところ、彼とエリスも、俺と同じでフィットア領から、転移してきたことを、知ることができた。

2人は、兄妹なのか聞いてみたところ、どうやら違うらしく、ルーデウスは、3年前に、エリスの家庭教師として、ブエナ村というところからロアの町に来たという。

その時、ルーデウスは7歳で、エリスは9歳だったらしい。俺と同年で、家庭教師をやるのか、何者だよ……。

ジョナスが言っていた、ブエナ村の魔法使いはおそらく、彼だろう。

彼に聞いてわかったことだが、生まれつき魔力が決まっているっていうのは、嘘だったらしい。

最初は、ウオーターボール数発しか、撃てなかったルーデウスも、たくさん使っているうちに、魔力が増え続けていったようだ。

俺も、ずっと練習し続けていけば、スタンドを出せる時間も、1時間ではなく2、3時間とかに、なっていたのだろうか……。

まあ、過ぎたことを振り返ってもしょうがない。今どうやったら、強くなれるかを考えた方がいい。

まずは、この町に入ってやらなければならないことを、達成するか。

どうやら、ルイジェルドはこの町に入ろうとしたことは何度もあるようだが、全て追いつかれてしまったという。

なぜ、スペルド族だということだけで差別するのだろうか。

彼が、こんないい人なだけに、納得いかない。

「ルーデウス、どうやってルイジェルドをここに入らせるんだ？」

「そうですね……変装とかでしょうか」

たしかに、うまく変装できれば門番の目を欺くことができるな。

だが、ルイジェルドはむっとした顔で俺とルーデウスを睨んできた。

何かダメなところがあっただろうか。

もしかして、スペルド族にはそういう事を禁止するしきたりがあったのだろうか。

「落ち着いてください、まずは町中に入るからです」

「そうだと、ここに入らなくてはお前の名誉も、俺達の旅もここから進まん」

「いや、変装とはなんだ？」

「え？」

「どうやら、変装を知らなかったようだ。だったらそんなに怖い顔で睨まないでくれよ……。」

そしてルイジェルドはルーデウスの作った、フルフェイスフルメットで門番の目を欺き、町の中に全員無事に入ることができた。

お金のやりくりなどはルーデウスがうまくやってくれるだろうから、俺達3人は戦うだけでいいな。

本当に彼らの仲間になれてよかった。俺1人だったら中央大陸に戻るなんてことはできないだろう。

彼らの信用を裏切るようなことはしないようにせねばな。

ルイジェルドはスペルド族だということを隠すために髪を青色に染めることになった。

おまけで、弱いふりもするらしい。

俺はスペルド族は強くてとても優しい人達だということを知らしめたいが、今の状況では少し難しいか……。

まあいい、まだ慌てるような時間じゃあない。ゆっくり、名誉を回復させていこう。そして、俺とエリスは少し髪の色が目立つからフードを被るらしい。

人族の中では金髪はあまり目立たないだろうが、ルイジェルドの青髪を強調させるには少し目立ってしまおうか。

たしかに仕方がないことだが……。

「ルーデウス……、なんで耳付きなんだよ」

めちやくちや批判する気でしたが、隣でエリスがめちやくちや喜んでるから、そんな事はできない。

「エリスもこんなに喜んでるから、我慢して下さい」

この男は……！

いや、これもルイジェルドのためだ。

我慢して付けよう。

(ジョジョのセリフを言うのはまったく恥ずかしく思わないのに、なぜこれは……！)

いや、ルーデウスだって中身を知らずに買ってしまったのだろう。

彼に落ち度はない。

まずはこの冒険者ギルドを乗り切らねば……！

「あ、ジョイル、似合っていますよ」

決めた。こいつはあとで殴ろう。

## 第七話

なんやかんやあつてギルドで冒険者登録をすることができた。

言語がわからないから周りにいたやつらが何を言っているのかはわからなかったが、完全に舐められていたな。

まあ、今はそっちのほう動きやすいだろう。

ルイジェルドが本物のデッドエンドだという事がバレてしまうと、また町から追い出されてしまうからな。

登録した時に冒険者カードという物を貰えるらしく、そこには光った文字で、

---

名前：ジョイル・ジョレンタイン

性別：男

種族：人族

年齢：10歳

職業：幻霊使い

ランク：F

と書いてあった。

名前、職業、ランクは職員が手動で書くが性別、

種族、年齢は魔道具で読み取ってくれるようだ。

職業を教えた時に職員は困惑しているようだったが、そこはプロ。何も言わずにしつかり書いてくれた。

そして俺たちのパーテイ名は『デッドエンド』になった。

たしかにルイジェルドの名誉を回復するならこの名前が一番いいな。

俺たちが受けれる依頼はFとEだけだ。

討伐系の依頼はCランクからだから危険はないな。

今日はどのような依頼があるかを確認するだけだったから、依頼を受けるのは明日からだ。

どれも簡単な依頼だらけだったが決して手は抜かずに全力をつくそう。

そして冒険者ギルドを出ると外はもう暗かった。

空はまだ明るいのに、町の中だけ暗いのはこの町がクレーターの下にあるからだろ  
う。

「はやく宿を探しましょう」

とルーデウスが提案してきた。

ルイジェルドはわかったと言っていたが、エリスは不思議そうな顔をしていた。

「別に町の外で野宿してもいいんじゃないの？」

「まあまあ、そう言わずに、町中でくらいゆっくり休みたいじゃないですか」

「そう？」

俺はルーデウスに賛成だ。野宿だと魔物を警戒しなくてはいけないためぐっすり眠ることができない。

まあ百戦錬磨のルイジェルドが見張り番をやってくれるから大丈夫だとは思いますが、どうしても心配してしまう。

そしてすぐに宿に行くことになった。ルーデウスはどうやら少し疲れているらしい。たしかに彼に色々な事を任せっきりにしてしまっていたな。

手伝えることはしなくてはな。彼一人に押し付けるわけにはいかない。

そう思いつつ、宿に移動した。

そして俺達が入った宿は初心者向けのところらしく、テーブルには俺と同じくらい、



いやエリスと同じくらい歳の若者3人がいた。

ルーデウスが受付を済ませている時に、その3人のうちの1人がエリスに声を掛けていた。

「き、君も新人なのかい？一緒に食事でも」

ナンパだった。声が震えているが、話しかけられるだけ大したものだ。

前世の俺だったらこんな風に話しかけることなんかできない。常に受け身の対応だ。

だが、エリスは無視している。言葉がわからないのと純粹にこの男に興味が無いんだろう。哀れ。

「なあ、ちよつとでいいんだよ。その弟君達も一緒に」

俺は弟じゃあねえ。エリスも嫌がつているしそろそろ注意しておこうかな。

すると少年は何も言わずに視線をそらすエリスにイラついたのか、フードの端を掴み、グツと引つ張った。

普通の女の子であれば後ろにのけぞるだろうが、エリスはただの女の子じゃあない。少年も冒険者をやっているから力がかなりあるようだ。

そしてビツ、つと嫌な音を立ててフードが千切れた。

次の瞬間、エリスの強烈なパンチが少年の顔面に放たれ、地面に頭を叩きつけられて気絶した。

「……OH MY GOD」

おっそろしいパンチだな。プツツンしてるわ。

あとの2人もその圧倒的な暴力性の前に敗北し、若者達は全員気絶した。

「これは、ルーデウスが、初めて、買ってくれた、服なんだからね！」

ルーデウスに完全にゾッコンだな。まるでD I Oに忠誠を誓うヴァニラ・アイス……いやそれ以上か。

何も出来ない哀れな少年を何度も何度も必要以上に蹴り続ける。

さすがにそろそろ止めないとあの子死ぬんじゃないのか。

一応スタンドを出しておこう。

「おい、エリスもう終わりに——」

エリスに近づいた瞬間、俺にも正確無慈悲なパンチが飛んできた。ギリギリ時間を止めることが出来た。

時を止めたおかげでパンチは俺の顔面の真ん中に当たらずに、左頬をかすっただけだった。

(なんつーパンチだよ……)

こんなのをマトモに食らったら一撃で意識吹っ飛ぶわ。

そんな事を考えていたら、もう1発、パンチが俺のところに来た。

「うッ!？」

腕でガードする事はできたが、めちやくちや痛い。

3発くらい食らったら骨にヒビが入りそうだ。

まじにスタンドを使わないと俺が殺される……!

だが、

「抑えて! エリス、それ以上はいけない! ハウス!」

ルーデウスが止めてくれたおかげでそうはならずですんだ。まだ納得言っていないようだが、もう殴ってはこなそうだ。

本当に殺されると思った……。魔物なんかの100倍は恐ろしい。

こういう時に止めてくれそうなレイジエルドは、微笑ましいものを見る目で見物していた。

もしかしてこれが子供の喧嘩に見えていたのか!?

1歩間違えていたら殺し合いになっていたんだが……。

次からは止めてくれ……。

食事と、エリスに傷つけられた少年達の手当を済ませ、部屋に入った。

ベッドが3つしかないようだ。

「俺は壁によっかかって寝るからベッドはいいよ」

そう言ったら、ルイジェルドが俺の頭を撫で、

「子供はそういう気遣いをしなくていい」

そう言つてベッドを俺に譲ってくれた。

俺はもうすぐ40になるといふのになぜ頭を撫でられて嬉しく感じてしまうのだろうか。

ルイジェルドという人物は見ていて安心できる。彼の信頼だけは損ないたくないものだ。

明日は何をしようか。彼ら3人であれば金は足りていただろうが、俺がこのパーティーに入ってしまったから2週間、いや1週間程度で手持ちの金はなくなってしまうだろう。

俺にはスタンドがある。相手にバレずに金を盗むなんてこともできるがそんな事はしたくない。

(俺の頭がよかつたら、こういう時にいいアイデアが浮かんでいたんだろうな)

何も思い浮かばずに、俺は眠りについた。

話し声が聞こえて目が覚めた。窓を見てみたが外は暗く月が出ている。まだ深夜のようだ。

(こんな時間に何を喋っていたんだこいつらは……)

そう思いあたりを見回していたら、ルーデウスがエリスの頭に手を置いていた。

目を逸らそうと思っただが、時すでに遅し。目が合ってしまった。

「……」

見て見ぬふりをしておこうか。こういう時にかかってはいけない。彼らも色々不安だったのだろう。

こうして冒険者生活の1日目は終わった。